

クローズアップ・レポート第7回

競馬サークルをとりまく、さまざまな話題を広報委員が訪ねていくコーナーです。
第7回は「京都競馬場入場門リニューアル」についてレポートします。

入場門が生まれ変わりました

2月28日、京都競馬場の新しい入場門が完成しました。リニューアルされた旧1・2番ゲートは、それぞれ「シンザンゲート」、「ステーションゲート」と名称も変更。2階建てのステーションゲートは一部高架化された京阪電鉄新淀駅と連絡歩道橋で連結を予定しており、一昨年の大型ターフビジョンに続き、京都競馬場がますます便利に進化を遂げます。

コンセプトは「調和」

新装された門は、京都競馬場のシンボル「白鳥」の白を基調としながらも、パドックやスタンドの形状にある「円形」を2階部分の屋根に取り込み、内壁は京町家の格子を連想させるデザインに。既存施設との調和(=京都競馬場らしさ)、地域との調和(=京都らしさ)を意図しているそうです。京都競馬場総務課の竹田和史さんによると「入場門と直結する京阪淀駅が、三川合流や淀城のお堀に代表される淀のイメージ・水をコンセプトにしたものになるということで、入場門も駅との一体感を大切にしました」とのこと。新入場門は自然光が多く入り、明るく透明感あふれた空間になっています。

また、新入場門の名称は、従来の1番ゲート・2番



JRAの10ある競馬場の中で唯一の円形型パドック



ゲートではあまりに業務的という考えから、新しい名前を京都競馬場の職員にアンケートを実施。凝りすぎた名前にして、お客様に覚えてもらえないのでは意味がないということで、駅に直結する「ステーションゲート」と、シンザン像が近くにある「シンザンゲート」に決定しました。



源と立つシンザン像

これまでの経緯

今回行われた入場門のリニューアルは、元々は京都市と京阪電鉄が進められた「京阪淀駅周辺整備事業」が始まり。淀駅周辺では以前から交通渋滞が著しいという問題があり、京阪電鉄の高架などにより、渋滞を解消することは地域住民の利便性向上と地域発展につながると考えられていました。京都競馬場としても、競馬開催時の混雑解消や地域の発展に寄与するという立場から協力しようと判断。JRAの特別振興事業と

して1996年から京都市・京阪電鉄と協力して同事業に取り組んできました。

淀駅の移設については、周辺に京阪電鉄淀車庫や河川があることなどを考えて、競馬場周辺が条件的に合致したそうです。

利便性に優れた競馬場に

淀駅との直結が完了すると、京都競馬場への利便性がこれまで以上に向上します。淀駅の2



階デッキに設置される競馬場専用改札口からステーションゲートまでは約270m。屋根も設置されているため、雨の日でも傘の必要もありません。ステーションゲートには入場券・指定券の発売所や入場改札、多目的トイレのほか、1階部分には平日払戻所やターフィーショップがあります。2階から1階への移動はエレベーターも利用できるようになっています。

淀駅はステーションゲートと淀駅が直結される今秋の第4回京都開催時では、現状と同じく下り線(大阪方面)のみの利用ですが、平成23年度中には上り線の高架も完成予定。大阪方面からのアクセスもスムーズになる予定です。



上：着々と工事が進む淀駅

右：淀駅とステーションゲートを結ぶ連絡歩道橋



期待される効果と今後について

電話投票の普及などにより、以前と比べて競馬場の入場者数は減少しています。「もちろん天候やその時々に行われているイベントなどにも左右されますが、やはりG であってもスターホースの出走の有無など、レースそのものの質が大きな要素となっています。最近ファンの方がレースを選んで来場していると感じますね」と竹田さんは話します。これまでも京都競馬場では、京都芸術デザイン専門学校の学生による壁画デザイン展示や、デザインした学生に特別競走のプレゼンターになってもらう「競馬場と学校」という異色のコラボレーションなど、競馬場入場者増加に向けてさまざまな取り組みを進めてきました。今回リニューアルされた入場門も、その効果が期待されています。

競馬場にはライブ観戦の迫力や、開放的な空間で爽快な気分になることができるといった魅力があります。我々馬主としても、新入場門の完成をきっかけに、より多くのファンが集まり、京都競馬場がさらに発展することを期待したいと思います。

